

富士山山行報告

[山行日] 7月20日(水)～7月21日(木)

[参加者] CL: 八角洋 SL: 菅井修 会計: 寺崎眞理

[コースタイム]

1日目

千葉 4:30-6:30 富士北麓駐車場-7:25 精進湖口赤池 7:40-9:20 県道 71 号 9:30
-9:40 風穴 10:10-11:10 軽水林道-11:25 鳴沢林道(天神峠 1 合) 11:40-2 合目 12:10
-13:00 高架下-3 合目 13:20-13:40 奥庭分岐-15:20 奥庭荘

2日目

奥庭荘 5:15-5 合目 5:30-6 合目 6:30-7 合目 8:10-8 合目 11:45-本 8 合目 12:10
-9 合目 12:50-13:30 頂上 14:00-8 合目 15:00-6 合目 17:00-5 合目バス停 17:45

[報告]

4:30 千葉を出発。富士北麓駐車場に車を止め、タクシーで精進湖口赤池に向かう。
運転手さんは宿泊先の「奥庭荘」によく寄るとか、話に花が咲いた。

7:40 青木ヶ原樹海の中に入っていく。15 分ほど舗装路を歩くと、苔生した溶岩の塊の上に樹木の根が覆いかぶさった異空間が現れる。登山道はきちんと整備されており、道幅が広くとってある。シダが生える所では直径 20 センチ以上もあるキノコを見つけた。道端に生えていたが、採られていないということは非常にマイナーな場所なのだ。後で奥庭荘のご主人にそのことを話すと「見たことがない。採ってくればよかったのに。」と残念がっていた。



50 分ほど同じような景色の中を歩くとアカマツ林に変わってくる。ほとんど勾配がなかったような道が急になったかと思うとまただらだら道になってくる。樹海の中とは違った日差しの明るい風景は、松林の原始林なのだろう。

菅井さんの説明を聞きながら永い時の流れを思う。

9時過ぎ、登山道を横切った道路の近くで休憩。植生がまた変わり、ヒバ類の林からまた溶岩でできた樹海に入ってしまった。「風穴」と書かれた看板があったので、ちょっと寄り道。巨大な穴を降りていくとその端に2箇所向かい合うように大きな洞穴があった。風がひやっとして気持ちがいいが、一人では居たくないような場所だ。ここで、初めて人に会う。30分ほど風穴で過ごす。



11時過ぎ、2カ所目の鳴沢林道の車止めを過ぎる。ここがやっと1合目の天神峠だ。これまでの石を積み上げて壁にした平らな道とは違い、U字に掘った縁の火山灰土壌から出た火山礫がごろごろしていた。両脇が藪笹の道を進む

12:10 2合目、精進湖線の車止めを越えるとすっぽりネットを被った柏の若木畑が現れた。ここも鹿の害がひどいらしい。古ぼけた小屋の前を通り、精進湖登山道に出るとブナ林が出現。大木が何本もあり、枝も幹に沿って真っ直ぐ伸びている。

歩いた距離に、溶岩がこんなところまで流れてきたのだと富士山の裾野の長さや広さを実感。

13:00 スバルライン高架をくぐる。20分後には3合目バス停に出て休憩。何台ものバスが行き交ったが、疲れ果ててバスを待っている登山者と間違えて合図をしてくれる運転手さんもいた。



13:40 これまで木々が生い茂った登山道を歩いていたが、急に火山礫で出来た、だっ広い全く樹木の生えて居ない広場交差点に出る。

15:20 モミの木林、カラマツ林を抜けて「奥庭荘」に着く。先のタクシーの運転手さんが我々の到着を宿主に連絡してくださっていたとのこと。



[2日目]

5:15 「奥庭荘」出発、保全協力金と引き換えに間伐材で作った札を貰う。これは富士山世界遺産センター入館の割引にもなる。

5:30 5合目入山。早朝なので登山客はほとんどいない。泉ヶ滝はすっかり乾いていた。ヤマユリ、ホタルブクロがかわいい。シャクナゲはやっとわき始めたという感じ。ダケカンバは強風に押し倒されながらもしっかりと斜面に垂直に根を生やしている。佐藤小屋の脇は大きく削れた跡があり、その後も幾筋も崩れた後を目にする。

5:55 6合目、警備派出所。所員さんたちは7人で24時間体制、2か月間富士山に居っぱなし。警官も常時2~3人は待機しており、土・日曜日には7~9人体制になるとのこと。去年は前の年の20万人より少なく169,500人の登頂。今年はもっと増える見込みだそうだが、世界遺産に登録されてから登山者が減ってきているとか。「…ならなかった方がよかったかも…」の声も。

6:00 6合目出発。外国人の登山者が多い。日本人にはほとんど出会わない。

八角さんの様子がおかしくなってきた。「気分が悪い。」と動けなくなってしまったのだ。休憩してむかむかが収まったので、登り始める。

7合目辺りから学生や家族連れの日本人を見かけるようになった。

今度は八角さんの足が動かなくなってしまう。菅井さんに励まされながら数歩出すが、すぐに一歩がでなくなってしまう。「高度障害」。八角さんは近所の低山でトレーニングを積んでいるので、脚力には全く問題はない。家庭の都合で、宿泊を伴うよう

な高山にはここしばらく登っていないので、希薄な空気に体がついていかなかったようだ。

8 合目、白雲荘 3,250m「登るのはここまで」と決めた八角さんと落ち合う場所を決め、菅井さん、寺崎は先を急いだ。火口を覗いて下ってくると、元気な八角さんを発見。八角さんの下りの足取りの軽いこと。



高山に登るには事前に高い山を経験するか、8 合目辺りで宿泊するか、それなりの準備が必要と痛感した。

ほとんどの日本人は完全装備で登っていたが、欧米人の服装にはびっくり。靴こそスニーカーだったが、散歩に行くようなスタイルだった。しかも速い。農耕民族と狩猟民族との差か？

青木ヶ原樹海からの登山は大変だったが、樹海の素晴らしさは言い尽くせない。埃っぽくてあまり好きにはなれない山だと思っていたが、菅井さんの説明、そして裾野から歩いてみて、やっぱり「ふ〜じはにっぽんいちのやま」だ。（文責:寺崎）